國制が、いつ・どのようにして成立したのか、という問題に對しても、一定の見通しを立てておきたい。これが第二點である。その際、同時代の中國王朝からの影響もさることながら、五胡―高昌郡時代や、先行する諸氏高昌國時代からの繼續性にも注意を拂いたいと思う。

アクバル時代末期の史料について
――いわゆる『アフワーリ・アサド・ベグ』を中心に――

眞下裕之

アクバル時代の公式の王朝史『アクバル・ナーマ』は著者の暗殺により治世第四七年初（一六〇二年）までの記事をもって中絶している。このため、以降アクバルの死去（一六〇五年）までの時期については、同時代史料がきわめて乏しく、詳細な情報は後代に編纂された年代記に據るほかない。

このような史料狀況において、その時期にアクバルに仕えた人物によって書かれた記錄である、いわゆる『アフワーリ・アサド・ベグ』は貴重な同時代史料として利用されてきた。

にもかかわらず、本書の校訂本はいまだ存在せず、ごく部分的な翻譯が公刊されているに過ぎない。また本書の史料論を試みた研究も皆無である。

そこで、本研究は、今日知られる本書の寫本六點を檢討した上で、

一．寫本系統の考察をふまえて校訂本作成への指針を示し、
二．著者の履歷、著作時期などの檢討から、基礎的な史料論を示す。その上で、
三．他の史料との對照において史料的價値を檢討し、
四．この時期に關する史料全般の諸問題にも論及する。

「近代」に直面する遊牧民
――ヤージュ・ベディルの事例から――

江川ひかり

ヤージュ・ベディルは、西アナトリアにおいてオスマン朝の行財政機構に組み込まれることとなった遊牧民グループのひとつである。一五三〇年、ヤージュ・ベディルは、「ヤイジュラル・ユリュクレリ・ジェマアティ」として知られ、行政的にはマニサ縣ギョルデキ郡に歸屬していた。當時納稅對象戶として一一戶が、一八世紀初頭には約八〇戶が、さらに一九世紀中葉にはバルケスィル地域にあわせて二四七戶が存在した。このことからヤージュ・ベディルは、人口增加と新たな經濟力の獲得とにともなって、ギョルデキ周邊から生活の場を擴大していったと考えられる。ヤージュ・ベディルは、もともと弓（ヤイ）を製造してきたことによって古くから「ヤイジュラル（弓職人）」という名で知られてきた。例えば一六世紀前半には一一～一二の弓を、一八世紀初頭には八〇～八一の弓